

澤井義次著『シャンカラ派の思想と信仰』

山 本 和 彦

本書は八世紀頃のアドヴァイタ（不二一元論）・ヴェーダーンタ学派のシャンカラを信仰するシャンカラ（スマールタ）派の思想とシャンカラ派の在家信者の信仰の現状についての、シャンカラ作と信じられている諸文献とシユリンゲリー僧院での調査とによる研究である。

シャンカラについての日本語での研究書は、中村元『ブラフマ・スートラの哲学』（岩波書店、一九五二）、前田専学『ヴェーダーンタの哲学 シャンカラを中心として』（平楽寺書店、一九八〇）、金倉圓照（訳）『シャンカラの哲学 ブラフマ・スートラ 釈論の全訳』上・下（春秋社、一九八〇・一九八四）、前田専学（訳）『ウパデーシャ・サーハスリー』（岩波文庫、一九八八）、中村元『シャンカラの思想』（岩波書店、一九八九）、島岩『シャンカラ』（清水書院、二〇〇二）、湯田豊（訳）『ブラフマスートラ シャンカラの註釈』上・下（大東出版社、二〇〇六・二〇〇七）、宮元啓一『インドの「一元論哲学」を読む シャンカラ『ウパデーシャサーハスリー』散文篇』（春秋社、二〇〇八）などがあるが、シャンカラ派についての研究書は本書が初めてである。

なお、シャンカラの真作ではないが、インドのシャンカラ派の在家信者からシャンカラ作と信じられている『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』の和訳として美莉亜（訳）『識別の宝玉 完訳「ヴィヴェーカ・チューダーマニ」』（パイッソリユーション、二〇一四）がある。

本書の目次は次の通りである。

はじめに

序章 シャンカラ派研究の視座

- 一 インド宗教研究とシャンカラ派伝統
- 二 従来のシャンカラ研究の状況

第一部 シャンカラ派の宗教学的的研究とその立場

第一章 宗教的パースペクティヴ

一 方法論的な地平

二 信仰の意味世界への視座

第二章 シャンカラ派伝統とその宗教的コスモロジー

一 シャンカラ派の宗教思想とその特質

二 「生きたテクスト」としての信仰現象とその理解へ

三 シャンカラ派におけるバクティ頌とその意義

第二部 シャンカラ派の宗教思想としての脈絡

第三章 シャンカラ派僧院の歴史と伝承

- 一 シャンカラ派僧院に関する伝承資料
- 二 シュリンゲリ僧院とスマールタ派
- 三 巡礼地としてのシュリンゲリ僧院

第四章 シャンカラ派の宗教思想の特質―特に「信仰」の概念と意味をめぐる

一 シュラッダー(信)―聖典と師の言葉への信頼

二 バクティ(信愛)―カルマン(祭祀的行為)とヨーガとの関連において

三 シャンカラ派における「信仰」の特質

第三章 シャンカラ派における在家信仰とその思想

第五章 シャンカラ派の在家信仰と伝統慣習

一 シャンカラ派の在家信仰

二 ヴェーダの学習と儀礼

第六章 シャーラダー神信仰とその意味構造

一 シャーラダー神信仰とその様態

二 シャーラダー神寺院におけるプージャの諸相

三 シャーラダー神信仰の意味構造

第七章 シャンカラチャーリヤ信仰とその意味構造

一 シャンカラチャーリヤ信仰の基本構造

二 シャンカラの伝承とその信仰

三 シャンカラチャーリヤ信仰の思想構造

第四部 シャンカラ派の出家遊行とその思想

第八章 出家遊行の生きかた―その思想と様態

一 シャンカラの出家遊行論―解脱論との関連において

- 二 伝承にみるシャンカラの出家遊行―シャンカラの伝説的伝記を手がかりとして
 - 三 シャンカラと出家遊行―シャンカラの伝説的伝記の意味論的考察
 - 四 伝承にみる具体的な出家遊行とその思想―シャンカラの伝説的伝記をめぐって
- 第九章 シャンカラ派における具体的な出家遊行とその思想

- 一 出家遊行の現実とそのプロセス
- 二 世師後継者の出家遊行
- 三 出家遊行者の日常生活
- 四 シュリンゲリ僧院の統治者としての世師

結論

略号ならびに参考文献

あとがき

索引

序章ではシャンカラの著作の真偽問題が取り上げられる。シャンカラに帰せられる著作は三〇〇以上ある。それらの真偽について、インドの伝統的なシャンカラ研究と欧米日本の文献学的研究とが大きく異なることが述べられる。インドでは神への讃歌であるバクティ頌(ストートラ)はシャンカラの真作と見なされているが、欧米日本では偽作と考えられている。シャンカラの主著『ブラフマストトラ註釈』の思想から逸脱しないものがシャンカラの真作であると考えると、『プリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド註釈』など十種類の『ウパニシャッド註釈』、『バガヴァッド・ギーター註釈』、『ウパデーシャ・サーハスリー』などがそうである。神への信愛(絶対的帰依)を手段として

解脱できるというバクテイ思想は『ブラフマーストラ註釈』のなかで否定されているので、『サウングルヤ・ラハリ』、『シヴァーナンド・ラハリ』などの諸バクテイ頌は偽作ということになる。しかし、本書の研究姿勢として、従来偽作と見なされてきた文献を切り捨てるのではなく、シャンカラ派の歴史と現実の信仰を示す資料としてそれらを取り込んで考察することが述べられる。

第二章において、シャンカラ派にとつてのバクテイ頌の意義が述べられる。バクテイ頌はシャンカラ派の在家者の信仰体験のあり方を言説したものである。在家信者は、シャンカラが否定している恒常の儀礼などの祭祀行為（カルマン）を行つてゐる。このような在家信者の信仰がバクテイ頌成立の背景をなしており、バクテイ頌は在家信者にとつては聖典となつてゐる。シャンカラ派の伝統によれば、真作と認められる哲学書でも、そうではない讃歌でも信仰の言葉は、超越的なものである神と人間との究極的同一性がその本質である。これはウパニシャッドの中心思想である梵我一如とまったく矛盾しない。

第四章において、シャンカラ派のバクテイ（信愛）の意味が考察される。シャンカラはバクテイを二種類に解釈する。「解脱のための漸次的な準備段階にあるバクテイ」と「最高の実在の知識 (jñāna) によつて特徴づけられるバクテイ」とである。バクテイ（信愛）をジュニヤーニヤ（知識）と定義することは『バガヴァッド・ギーター』十二・二〇に対する註釈のなかで見られる。「バクテイは最高の知識という定義を持つものである」とシャンカラは言う。『ブラフマーストラ註釈』などシャンカラの真作では知識が解脱の手段であると説かれている。バクテイが知識を意味するのであれば、バクテイを解脱の手段とするバクテイ頌もシャンカラの真作と見なしてもよいことになる。シャンカラ没後の思想が混入しているなど明らかにシャンカラ以後に成立したと考えられるバクテイ頌はシャンカラの真作ではない。しかし、シャンカラの『バガヴァッド・ギーター註釈』に従えば、バクテイを解脱の手段と説いているという理由だけでは、そのバクテイ頌がシャンカラの真作ではないとは言えないのである。そこで、著者である澤井

義次氏は一九七六年にJAOS誌において発表されたロバート・E・グスナー氏の論文「シャンカラに帰せられる一七のサンスクリット讃歌の著者についての統計文体論的研究」を取り上げる。この論文のなかで、『ダクシナムールティ・ストートル』はシャンカラによって書かれた「可能性が十分にある」(well founded)とグスナー氏は言う。ダクシナムールティはシヴァ神の化身である。この讃歌は金倉圓照氏によって「ダクシナムールティ・ストートル」〔中村瑞隆博士古稀記念論集 仏教学論集』春秋社、一九八五年、三一九頁〕として和訳されており、序言と追記においてシャンカラ作の真偽について少し触れられている。そのなかでゴンダ氏が『サンスクリットで書かれた中世宗教文献』(一九七七)のなかで「シャンカラの真筆とは説いていない」と述べていると金倉氏は言う。これに対し、ラダクリシナン氏は『インド哲学』第二卷(一九三二)のなかで、「この頌の真偽を全く問題としないばかりでなく、むしろシャンカラの信念の実態を直接に示す証拠に使用している」と述べていると金倉氏は言う。さらに、シャンカラ研究の権威であるポッター氏が『インド哲学百科事典』(第三卷「シャンカラと彼の弟子たちまでのアドヴァイタ・ヴェーダンタ」一九八二)のなかで「この問題(『ダクシナムールティ・ストートル』のシャンカラ作の真偽)は未決定にしておかねばならない」(the matter must be left in suspense)と言っていることを金倉氏は紹介している。金倉氏自身は真偽の判断には沈黙している。シャンカラの偽作だと断定している研究者は一人もいないが、真作に傾いている研究者はいる。内容的には、仏教を意識してなのか「空」(シューニヤ)という言葉が使われていたり、因果関係や主従関係が言及されるなど讃歌(ストートル)としては哲学的である。以上のようにシャンカラ作と言われているバクティ頌の真偽問題は複雑さを極めているのであるが、著者自身の見解が示されていないことは残念である。

第五章において、シャンカラ派の在家信仰が考察される。シャンカラ派の総本山であるシュリンゲリー僧院は、もともと出家修行者の住居であり、哲学的信仰的な探究の場であった。それが、十四世紀以後、第十二代世師ヴィドヤランヤの影響のもとに大きく変化した。つまり、ヴィジャヤナガル王や一般信者から寄付を受け取るようになって

た。そして世師が遍歴する際にはバランクインという乗り物を使うようになった。またシャーラダー神像が木製のものから金色のものに据え替えられ、シユリー・シャーラダ寺院が建て替えられた。シユリンゲリー僧院のシャンカラチャーリヤは、出家遊行者の長でもあり、僧院の長にもなった。僧院は祭式行為を行う場となり、巡礼の場になった。

シャンカラ派のブラフマチャーリン（梵行者、学生）は、ヴェーダ聖典の学習と祭火の崇拝と太陽の崇拝を行わねばならない。この太陽の崇拝はガーヤトリー・マントラによって行われる。なお、女性はシユリンゲリー僧院のサンスクリット学校で教育を受けることはできない。さらに、女性はガーヤトリー・マントラを唱える資格がないので、その代わりにバクティ頌によって礼拝することになっている。

家住者は、朝のアグニ・ホートラと夕方のアグニ・ホートラを行う。つまり、天啓聖典で命じられている祭式行為を行っている。著者は第三四代世師チャンドラシェーカラ・バラティーの言葉を紹介する。それは「行為（カルマ）、信愛」（バクティ）、それに知識（ジュニヤーニヤ）として知られている道はすべて、サントヤー崇拝の中に組み込まれている」、「神に対する信愛とおして、絶対的なブラフマンの知識さえも得ることができる」というものである。この発言は祭式行為によって解脱できると明言するものであり、祭式行為による解脱を否定するシャンカラの思想から逸脱しているが、出家と無縁の在家信者には魅力的な言葉であろう。

第六章では、シャンカラが祀ったシャーラダー神への信仰について考察される。シユリンゲリー僧院のシユリー・シャーラダ神寺院に祀られているシャーラダー神を礼拝すると苦や不幸の除去、救済、健康や繁栄をもたらす。在家信者は解脱を求めているのではなく、現世利益を求めており、シユリンゲリー僧院はその歴史のなかでそれに応えてきたのである。寺院を財政的に維持しなければならぬ役割を担っている世師が、寄進によってその財政を支えている在家信者の願いを聞き入れることは、シャンカラの深遠な思想を理解していても、当然のことであろう。

著者はシャーラー神に対するバクティ頌『バヴァーニ・アシユタカ』（母神である）バヴァーニ神に対する八頌）を紹介する。「私は布施も、また、瞑想の道も知りません。私はタントラも、また、讚詩やタントラも知りません。私は礼拝も、また、ニヤーサの道も知りません。バヴァーニ神、あなただけが、私の頼りなのです」。母神（シャーラー神）は、恩寵をとおして信者の願いを叶えてくれるのである。この母神であるシャーラー神もまた究極的にはシャンカラと異ならない。

第七章において、シャンカラチャーリヤ信仰について考察される。シュリンゲリ僧院の長である世師シャンカラチャーリヤは、シャンカラの化身である。そのシャンカラはシヴァ神の化身である。この化身思想こそが世師の神聖を保っている。ブツダでさえヴィシユヌ神の化身ということになっているインドでは、化身思想は抵抗なく受け入れられる。

第八章において、出家遊行の生きかたについて考察される。シャンカラ派の在家信者にとって、出家遊行はほとんど不可能であり、解脱も求められていない。むしろ、現世利益が目的とされ、カルマン（祭祀行為）とバクティ（信愛）がその手段となつている。そうしたなかで、出家遊行者になるのは世師の後継者だけのように思われる。

解脱論との関連において、出家遊行者は祭祀行為を行わない。瞑想によって生じる明知（ヴィドヤー）、知識（ジユニヤーニヤ）によって解脱する。祭祀行為は解脱に間接的に役立つことはあるが、直接の手段ではない。解脱の直接手段は知識のみである。その知識は学問的知識のような世俗的な知識ではない。瞑想としてのヨーガによって生じる知識である。シャンカラのこのような解脱に関する考え方は、すでにウバニシャッド文献のなかに見られる。シャンカラは独創的な思想家ではないと言われる。しかし、天啓聖典によって自分の考えを根拠づける教証に関してはすばらしい才能を発揮している。神の言葉である天啓聖典のなかの言葉と思想を自由自在に駆使して、シャンカラは自身の思想を構築している。だからこそ、シャンカラの言葉と思想には誤謬がないことになる。それゆえに、シャンカラ

はシヴァ神の化身であると見なされてもよいのかもしれない。

祭式行為はまったく解脱に必要なわけではない。祭式行為によって「心の浄化」(satva-suddhi 本書二二頁)がなされるからである。著者はこのサットヴァを「心」と訳しているが、『バガヴァッド・ギーター』十六・一においてシヤンカラは、サットヴァを内官 (antahkaraṇa 意、マナス) と註釈している。内官という感覚器官を祭式行為によって浄化することによって、知識が発生し易くなるのである。本書三一頁では「心の浄化」(cittaśuddhi) と言われており、チッタが心と訳されている。サットヴァ (アンタハカラナ) とチッタをとともに心と訳すとチッタ (心) とアンタハカラナ (内官、意) とが同義語になってしまふので、術語の和訳には注意が必要である。

シヤンカラは、知行併合論に反対する。知は瞑想によって生じる知識であり、行は祭式行為である。解脱には瞑想と祭式行為との両方が必要であるという考えが知行併合論である。ヴェーダーンタ学派のなかでは八世紀頃のバースカラが知行併合論者であるが、シヤンカラは知識のみで解脱できるといふ知識論者である。このシヤンカラの考えは、十四世紀の新論理学派のガンゲーシヤにも継承されている。ガンゲーシヤは『タットヴァ・チンターマニ』「自在神の推理の章」のなかにある「解脱の論」において知識のみを手段とする解脱論を展開するが、シヤンカラの解脱論から大きな影響を受けている。ちなみに、ガンゲーシヤも「サットヴァの浄化」といふ言葉を用いるが、註釈者はアトマンの浄化と解釈している。

出家遊行は婆羅門 (ブラーフマナ) のみに許されている。出家遊行者は、祭式行為を行わず、離欲と瞑想によって生じた知識によって解脱する。

シヤンカラの生涯は一八世紀頃に書かれた『シヤンカラの世界征服』によって知ることができる。シヤンカラは七歳の学生期のときにすでに一切知者であった。シヴァ神の化身であれば、七歳で一切知者であつても不思議ではないだろう。そしてその後、ゴーヴィンダに弟子入りして、学生期から直接遊行期に入った。出家遊行者でありながら、

母親の葬儀を行った。これは祭式行為であり、家族への執着を断ち切っているはずの出家遊行者が行うべきではない行為である。シャンカラ派の在家信者、さらには出家修行者までもが祭式行為を行うことの正当性をこの伝説的伝記が与えているのかもしれない。

第九章において、シャンカラ派における出家遊行について考察される。出家した遊行者は、日夜インド中を遍歴するわけではない。一九二一年にシュリンゲリー僧院で出家遊行者となったシュリー・ラーマ・ナンダ・サラスヴァティーは町の喧噪や僧院の活動によつて邪魔されることのない一室が与えられ、そこで瞑想を実践したのである。はじめのうちは、神に対する礼拝も行う。世師に対するバクティを持つことも重要である。そして、世師から『バガヴァッド・ギーター』などの講義を受けていた。第三四代世師チャンドラシェーカーラ・バラティーについては「一九二三年早々、彼〔チャンドラシェーカーラ・バラティー〕は日々のプージャやさえも行なうのを止め、あるいは、ふだんのヴェーダーンタの講義もしなくなり、世界のことを完全に気にとめなくなつた」と言われている。離身解脱の直前になるとシャンカラの著作通り、祭式行為の放棄、離欲、瞑想による真知の発生などが起こるようである。なお、世師は普段シュリンゲリー僧院で暮らしているが、時々インド中を旅する。これが遊行である。出家とは家族のいる家を出ることである。つまり、家族に対する執着を断つこと、離欲である。

著者は「現代のシュリンゲリー僧院の伝統は、礼拝や儀礼の面で在俗信者たちを導くために、シャンカラの哲学思想を再解釈しなければならぬ状況にある」と言う。このことは、バクティ頌のなかにはシャンカラ真作のものもある、シャンカラ真作のなかで祭式行為（カルマン）の有効性が説かれている、ということ論証することであろうか。シャンカラの霧囲気とする『ダクシナムールティ・ストートラ』を偽作と断定する研究があれば、批判したくなるであろう。祭式行為が完全否定されれば、シャンカラが唯一出家を認めていたブラーフマナの仕事がなくなつてしまふだろう。

結論において、『ヨーガ・ストトラ・パーシユヤ・ヴィヴァラナ』は文献学的にシャンカラの真作であると著者によって言われているが、中村元氏は「シャンカラの真作であるかどうか、簡単には決定できない」、「たとえそれがシャンカラの真作でなかったとしても、もしもシャンカラに近い人が書いたのであるならば、やはりその註釈書は重要視されるべきである」（『中村元選集「決定版」第二四巻 ヨーガとサーンキヤの思想』春秋社、一九九六年、二七八、九頁）と述べている。この文献のシャンカラ作の真偽問題はまだ決着していないのである。

本書は過去に発表された論文を集めたものであり、重複部分が多くある。単行本にする際にはもう少し整理してもよかつたのではないかと思われる。参考文献は充実しており、シャンカラ派研究には有益である。索引も人名、事項、原語と三種類あり、ほどよい量が採用されている。冒頭でも述べたが、本書は日本語で書かれた最初のシャンカラ派についての研究書であり、これからのシャンカラ派研究は本書を踏まえなければならないのである。

最後に、本書の著者はシュリンゲリ僧院に実際に行つて、本書を執筆されている。その場を経験していなければ感じることのできない独特の宗教的雰囲気を感じとられたことであろう。筆者はシュリンゲリ僧院に行つた経験はないが、僧院が「活気に満ちた巡礼の場」（九五頁）であると描写されているのを読んだときに、マドウライのミーナクシー・スンダレーシユワラ寺院内部の神殿での活気を思い出した。篤い信仰、生きた宗教、信者が神を生かしている」と実感した経験の記憶がよみがえってきたのである。

二〇一六年八月二〇日発行・慶應義塾大学出版会、三三八頁、八千円＋税

ISBN978-4-7664-2357-0